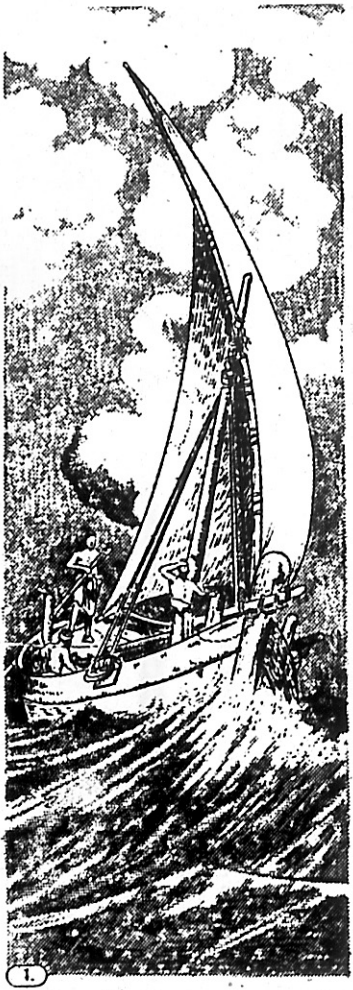


THE DAYBREAK

Jun. 1 (No 14) 1945

Rev. K. T. Shiraishi, Editer
15-2E, Rohwer R.C.
McGehee, Ark.

白石清個人雑誌（月刊誌）

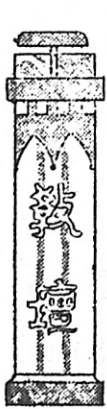
夜明

第十四號

□絶望の淵より。

地上の暗黒と反逆
海上の爭鬪と修羅
果しなき浮世の濁巷。
生命の地をもとめて得ず
死にまで追ひつめられし ヨナなりき
怒濤の叫びも風波の咆哮にかすれ
絶望の海底深く沈みつゝ
屍を永遠の祭壇に捧げんものゝ
先づ聖靈の流れをうくるさだめ。
偉大なる絶望の瞬間を体驗せし人ゝこそ
死を超えて再生の力を獲得し得ん。

○世に勝つ信仰



信仰は善き戦闘をたたかへ、永遠の生命をとらへよ。汝はかの為に召せられ、また多くの証人の前にて善き言明をなせり。（テモテ六・十二）

現世は花けち難儀苦労に満ちてゐるかと云ふ大別すれば自然苦、道徳苦及び生存苦の三つである。換言すれば、天変地災と罪悪と生存上の苦難とである。世の中が漸次進歩し、科学が発達して来たといふのに人類苦は少しも減らない。否却つて病氣の種類ちと夥しく殖えて来てゐる。人類は実に其の開闢の昔から是等の人類苦と戦ひつゞけて来た。宗教とは有ゆる宿命と人類苦と闘つて勝利を得る工夫である。人間は一生涯前述の如き人生の三苦と戦ひつゞけなければならぬ。斯うして人間は宿命的に「勝敗」といふ事に興味を有たされるとともになつた。即ち進化論の定義を供つまでもなく優勝劣敗を意識して、本能的に勝ちたい〜といふ欲望に駆られるやうになつた。今や世界を挙げての大戦に世界人の心は敵も味方も悉く「勝敗」如何の一事に集中せられてゐる。日本でも政府は今や頻りに国民の「闘志」の昂揚に努力してゐる。勝利は結局戦場の勇士のみに期待するわけには出来ない。ホーム、フロント即ち国内前線に於ても戦場の精鋭と相呼応して、所謂一丸となつて敵に当らねばならぬ。信仰生活を語るに勝敗を以てするは甚だ似つかない話のやうに聞えるかも知れない。即ち信仰生活は是れ平和の道であつて、戦闘とは花も正反対の事の様に思はれる。去り〜信仰生活とて、人をすて世を棄てゝ絶対孤独の生活に入つたといふのではないし、聊かでも人の世に関係のある以上、闘ひの生活は必然であり、且つそこには克服せねばならぬ数多の障害、排除せねばならぬ数多の困難が我を待伏せてゐるのである。而して如何なる害悪かあるにも拘つて〜飽くまでも最後の勝利を獲得するのが真の信仰生活である。松岡洋右氏が先日「米

國は武器で勝んとしてゐる。我等は精神で勝つのだ」と高調せられた。信仰の戰に於ても然り。肉的に敗けても靈的に勝つことである。我等は主キリストの御生涯に於て最も適切なる實証を見ることが出來る。彼らそはペリレヘムの厩での御誕生より、十字架上の御最後に至るまで難み通し悩まれた。然も其靈に於ては勝通し勝つ通けられた。而して最期のお言葉には「我既に世に勝てり」と宣ふたのである。斯く學者とパリサイ達は、彼を十字架上に殺したつもりでゐたが、其實には尚ほ一指をも觸れることは出來なかつた。世はキリストを十字架に釘けて自ら滅び、神の子を罪に決めて自ら罪を宣かれてゐるおとには氣がつかない。さるにても主基督が「すべて劍を執る者は劍にて亡ぶるなり」（マタイ二六）と宣ひし聖言ぐらゐ適切なるはない。人類は歴史の昔より劍にて勝んとのみ計る。而して繰返し〳〵無駄な努力をしてゐる。武力によつては永久に世を征服することは出來ない。昔劍を以て起ちしアッシリヤを見よ、バビロンを見よ、ギリシヤもローマも遂に亡んだではないか。聖書に「世に勝つ者は誰ぞ、神の子を信ずる者にあらずや」とある。又「世に勝つ勝利は我らの信仰なり」ともあるやうに、開闢の昔より數多の國は興り國は滅び、民は起り民は亡んだ。されど斯る中に信仰のみが勝ち誇つて今日に及んだ。それは何を意味するか。信仰の不斷の戰鬪と其勝利である。然り、人生のあらん限り戰鬪は經續せられるであらう。而して信仰者はどこまでも戰ひ抜かなければならぬ。信仰のスタートだけ花々しくて、中途挫折し落伍し墮落し去る悲しむべき實例の如何に多きかをなほへ。永續せぬ信仰に勝利はない。故、我らは如何に信仰生活を維持すべきか。その秘訣を探つて之によつて前進せねばならぬ。斯してこそ「日々に新なる恩寵」が加へられるのである。然らば信仰持續の要訣は何か。

第一、信仰の目標を明確にすること。――基督御復活の後、弟子達の信仰は果然一目標の下に團結して不思議なる一大靈力となつた。即ち「復活の力」である。「されど聖靈汝らの上に臨む時、

汝ら能力を受けん、而してエルサレム、ユダヤ全国サマリヤ、及び地の極まで我が證人とならん」

第二は此勝の確信である。――「神若し我らの味方ならば誰か我らに敵せんや」とは実に聖パウロが自ら四面楚歌の中にありながら福音の必勝を期し、ローマに在る教会の信徒を激励し、凡甲る苦難の中にありても「我らを愛し給ふ者により、勝ち得て餘りあり」と絶叫したのである。曾てはイスラエル人等がモーセ指導の下に学うじてエガプトの羈絆を脱れて紅海まで暮延びた時後方遠かに埃及軍の追跡するあり、前面一面の海、左右は曠野で逃るに逃られず、絶對絶命となつた。時恰如モーセは全イスラエルに神の聖旨を傳へた。曰く「汝等慌てず勿れ、立ちてエホバが今日汝等のために為し給はんとするを見よ。……エホバ汝らの為に戰ひ給はん。汝らは靜まりて居るべし」（出十四13）といふのであつた。「靜つてゐて勝つ戰」とは面白いではないか。しかし其れが信仰の戰の眞相である。モーセの歿後大將ヨシヤの下に、イスラエルがヨルダンの川を渉り、エリコへ進攻した時も、七度エリコ城外を畫めぐりしたゞけで城は陥落し、イスラエルは大勝利を得た。

第三は聖書に親しむことである。――どうも聖書を讀むことを臆劫がる信者が甚だ多い。勿論聖書は決して讀み易い本ではない。聖書にはその讀方があるから系統的に陷らぬやう教師の指導をうけねばならぬ。敬虔を以て拜讀するならば必ず靈性の滋養を賜ハり其の信仰は愈々堅実にせらるるのである。次に

第四の要訣は「我に信を增させ給へ」との祈にある如く、信仰を維持し又強固ならしむるものは結局信仰である。信仰は信仰の行を以て養ふの外はない。我らの身体は幾ら滋養物を食したからとて それだけで強健になれるものではなく、適當に運動し鍛練しなければならぬ。信仰に於ても同様、食うては寝ね起きては食するいふやうなことを繰返してゐたのでは信仰は到底強められるものではない。兵へられし信仰を活用し、旺んに運動しなければ折角の営養も却て信仰の消化不

良となるであらう。

軍立は祈禱である。――昔独立戦争の時、ワシントン軍一時形勢不振に陥り、民軍又意氣沮喪を来したことがあつた。其時、一民兵が前途を憂ひながら或る森の中を通りかゝつた。見ると路傍に馬を繋いであるので、附近を見渡すと、遠か彼方に人影を見出したので、尚よく見ると、ワシントン將軍が地上に跪りて、今しも熱禱を捧げてゐる姿であつた。此有様を目撃した彼は感激として營所に馳せ歸り、「我軍は勝てり！」と叫んだ。戰友は怪んで其故を問へば、以上のことを語つた。果せるかな、翌朱日々に獨逸を捲囲して遂に独立戰は米軍の大勝に歸したのである。信仰の祈は全く現實の狀態を変改せしむるものである。

以上に述べたる如く、信仰の生活を唯陶然として醉へるが如き恍惚境と觀るのは新約的ではない。現實の世界にあつては戰鬪は不可避である。故に初めから信仰的武裝を以て起たねばならぬ。由来、一つの信仰を以て世に起つことそれ自身一種の鬪ひである。即ち此の世に於ける凡ゆる不信仰勢力への挑戰である。故に此鬪志なき信仰は活ける信仰ではない。不信と惡魔に滿てる現世にあつて、信仰の生活を維持するは、大なる勢力と忍耐とを要する。況んや福音を宣傳し信仰による新社会を建設せんとせば、苦戰苦鬪は免れない。併し乍ら、此戰たるや、パウロがテモテに訓へし如く「善き戰」である。（ヘブル）即ち必勝の意氣を以て臨み得べき戰である。神學者リッチエルが申さんし如く「基督教の目的は人をして世に勝たしむるにあり」と。終局の勝利を期して「忍耐をもて我等の前に置かれたる馳場を走り、信仰の導師また之を全うする者なるイエスを仰ぎ見る」べきである。見れさそ信仰の勝利の秘訣である。（ヘブル）（明和教会説教一四四、十一月十二）

◇「イスラエルの聖者かくいひ給へり。なんぢら立ちかへりて靜かにせば救を得、平穏にして依頼すば力を得べし。」「汝右にゆくも左にゆくも、その耳に之は道也、之を歩むべし」と後進にて語るをきかん」

○世界的人格の諸相（其五）

ヤコブ書に學ぶ。

安部清藏

イエスの血を分けた弟ヤコブは、エルサレム教會の監督として單に一都市の宗教家たるのみならず、廣く天下に散在して居るイスラエル十二族の爲めの經宰者であつた。ヤコブ書に福の音が述べて無く、只道德のみであると言ふて、之を輕く見るのは甚だしき誤見である。此書は天下に離散し行く同族の爲めの宣言書であつて、福音は素より已に確認された事實であつた。今更反復する必要はない。此書は已に信仰にある放棄に對する、直截簡明堂々たる指導原理である。之を大別すると左の如くふる。

第一條、困難に處するの道――一章一―廿七
第二條、四海同胞の大義――二章一―廿六
第三條、平和の大本――三章一―十八
第四條、戰爭の禍根――四章一―十七
第五條、超越の急務――五章一―二十

以上の條項だけを見ても、如何に背景に當れる世界的宣言であるかゞ判る。

更に之を現代的に換言すれば、左の如く言ふ事が出來ない。

第一條、絶望なき信仰。
第二條、八紘一宇の理想。
第三條、偏見固執の打破。
第四條、滅私奉公の實踐。
第五條、神の審判の實証。

我等は今や切に平和を求めつゝある。併し絶望なき信仰を以て、家族一体の理想を實現せんが爲め、自家の偏見固執を捨て、利得を眼中に置かずして、只神の審判を仰ぐと云ふ極めて手近い生活に、ドレ丈け努力精進しつつありや、此日常些末の事柄に徹底せずして

如何で世界の大運轉に貢献する事が出来ませう。

ヤコブの世界的宣言は、又実に家庭への宣言であり、又個人への指導格言である。

筆者の反省と祈。

「神よ世界の物乱を思ふ時にそれ実に我等の教會の不調和家庭の不一致物に我等内心の不統一に直接歸因せずやと思ふ時、戦慄恐懼身を置くに所なきを感じます。願くは我等をして全くイエスキリストによつて、百八十度の大廻轉をふし、家庭の聖別、教會の統一に向つて奉仕する事を得しめ給へ」 アーメン。

○神の國の實現（哥林多前書十章廿二）

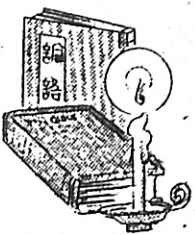
拳左吉

昔支那の漢に孝文帝と云ふ王があつて、千里の馬を獻ずるものが居た。帝はこれを見て「駑猴前にあり、馬車後に在り。吉行には日に五十里、師行には日に三十里、豚千里の馬に乗り、独り先づ何にか之かん」と言ひて、其良馬を選し道里の覺を異へて帰らしめたと云ふ逸話がある。これは学ぶべき一の教訓がある。即ち人生萬事民衆と偕に進まなければならぬと云ふことである。縱令ひ少数の天才があり、智者學者があり、發明家があれども、民衆が伴はなければ進歩するものではない。支那がその好き例である。少数の指導者はありとも民衆が愚盲蒙昧である為に國家は發展しない。支那の學者は、女子と小人は養ひ難し、と言ふて居る。國民の大多数を占める大切なる婦人と一般の民衆とを教育せず奴隷の如くして世が進歩し隆盛に到る道理がない。リンカーン大統領は、神は平凡なる民衆を好み給ふ、然らざれば神は人間の中に多数を占むる陛等を創造し給はざりしならん」と言ひて、民衆本位の行政を為したりと云ふ。幻數なき國民は亡ぶと云ふ聖句がある如く、先覺者は大切である。同時に民衆の啟發訓練と云ふことが更に必要である。基督教は世の無智なる者、淪落の人々さへ教化して一の王國を建設せんとする宗教である。使徒パウロは比較的無智の信

者の多かつたコリント教會へ書翰を送りて「汝等優れたる賜物を慕へ」と言ひて常に向上すべきことを教へた。如何に低級の人にても人生の至美崇高なるものを求むる渇望を抱かしむる事で教育することが出来る。　我等普通の者は己が欲するものを發明することも製造することも出来ない。然し人の製造したるものを活用することは出来る筈である。此處に我等の使命がある。民衆が新しきものを需要し應用することに由りて更に優れたるものを發明せしめ、又世を進歩せしむることが出来る。即ち多数の者が良き需要者となりて、優れたる供給者を出すと云ふことが進化の條件である。如何なる天才が居て新發明をなしたりとも之を利用する民衆がなければ終には廢物となるに過ぎない。

十五世紀に於てグテンバーグが活字印刷機を發明して以来西洋文明は長足の進歩をなした。歐州にては文藝復興が起り、古代文學の研究となり、聖書は各國の語に飜譯せられ印刷せられて現代文化の基礎を造てたのである。反之、支那ではその遠き昔に於て印刷術が發明せられたけれども、一般民衆に讀む力がなかりし為に之に對する要求が少なかつた。而して同じ發明も何等の貢献をなし得なかつたのである。一般社會に需要者があつて、新發明の效力も現はれ社會は進歩し、人生は祝福せられるのである。供給と需要と相伴つて進化の力となる。之を經濟界に應用して見ても眞理であることを知り得られる。昔は出来る丈け安價を労働で製造品を多く製出すれば資本家は必ず成功するとなるのが經濟學の原則と考へられた。労働者には生活し得る丈けの給金を與へよと云ふのが人道主義の資本家に對する要求であつた。然し今日では労働者には生活費のみならず人生を楽む丈の餘裕のある賃銀を拵はねばならぬと經濟學者は叫んで居る。例令ば近年自動車ラヂオ、ピヤノ、冷藏庫電氣機具其他萬般の製造業が進歩發達して行くのは唯少数の富豪が要求するのみならず一般社會が購買力を有するが故である。斯かる事業は購買力を有せざる亜米利加の蠻民の中では發展し得ないのである。千八百九十七年に英國の一軍人が若し独

逸を亡ぼし得ば英國人は莫大金滿家となり得ると放言したと云ふ。然るに第一世界大戰爭に於て独逸は大敗北をなした。英國は大繁榮をなしたるか。否反て經濟的に大損失を被つた。而して英國は独逸が經濟的に回復して購買力を生ずる迄は英國も回復し得ざりし事實を發見し得たのである。商賣政策の和談は消費者を多く造るにあり。共存共榮は唯に經濟上の問題であるのみならず。又精神界の原則である。今日の教界は製造方面に精力を集注して居る傾向がある。例令ば教会はすばらしく美麗なる會堂を建築する。社会事業に熱心である。内外傳道機関は完備して居る。教育の設備を整んにして教職者又は宣教師を輩出する。人心の要求を充たし得る供給は豐富である。需要の方面は如何と考へるけれども乏し。需要は人間の天性にある。無意的に母の乳房を探す赤兒から。膠が喃めつて墓場に近づく老人まで皆要求を有して居る。或人が小供は食慾に皮を着せたものであると言つて差閊はない。人間の要求には物質的のもの、倶樂的なもの、名譽的なもの、事業的なもの、安逸的なもの、虚榮的なもの、精神的なもの、宿的なもの、靈的なもの等があつて、人は慾望の化身と言つて差閊はない。其等の内に善なるものと惡なるものとあるが故に パウロは最も優れたるものを慕へと警戒して居る。これの最善なる賜物の需要者を造るおのに努力せざれば教会は決して健実に發展するものでない。初代の教会には使徒預言者教師具能ある者、病を醫す者、補助をなす者、治むる者、異言を語る者などが居た。然し此等は皆供給者である。需要者ではない。靈界の需要者は求道者であるとは言ふ迄もない。求道者を造らざる教會は發展しない。教会は世界の人類を悉く求道者となさねばならぬ。信者は求道者を起す爲に協力すべきである。然し更に大切なることは供給者たる者が常に優れたる賜物を慕ふ需要者であらねばならぬことである。然れば世の先覺者を始め凡て の者が優れたる賜物を慕ひ崇高なる人生に向て精勵し眞の平和なる社会を建設し、世界万民が天共の生を享樂し得るに至つて神の國は其の世に實現し得らるゝのである。



論語の聖書

第廿三、人物認識。

「子曰く、吾と回と言ふこと終日すれども、違はざること愚なるが如し。退いて其私を省みれば、亦以て發するに足れり。回や愚なる哉。」「子曰く、其以てする所を視、其由る所を觀、其安んずる所を察すれば、人焉んぞ廋さんや。人焉んぞ廋さんや。」

多くの高弟中孔子は殊に顏回を愛し、彼の氏道を憚び、屢々賞讃せられた。孔子の曰く、私は回と一日中話してゐても彼は唯默々として聽くのみにて、敢て質問もしない。愚人のやうであるが、あれで門人同志と話してゐるのを聞くと、誰から學んだかと思ふやうな眞理をでも悟得してゐる賢心を男だ」と簡單なる顏回の人物評を述べられた。

偖て、孔子は人物の鑑識法につき、日毎の行動を見、次に、彼が以前より爲てゐる事を調べ又、如何をるかに安心滿足してゐるかを探つて見れば、概ね其人が如何なる人物であるかが判るものであると申された。米人と交際してゐて孫に感ずる事は、彼等の人物鑑識は概ね極めて單純卒直なることである。是は彼等自身が單純卒直であるから、自然斯樣を見方をするのであらう。それは彼らの明るい氏族性の一面を表現するもので結構である。だが、人間はかーなべて左樣に單純ではない。殊に日本人のやうに、顏で笑つて、心で怒つてゐる場合も尠くはない。又頭黑い者ほど巧言令色の多いものであり、それを其價の値段で買つたら、大損するにきまつてゐる。

古來偉業を成した人は、人をよく用ゐた人であつた。人を用ひた人は、其人をよく識つた人である。孔子の人を識る法は前に彼自身の言に現はれた樣に、石橋を叩いて渡る樣を入念なものである。然るにイエスの人を識る法は、全く是と趣を異にし、凡てが彼の透徹したる直覺力に由てなされ、而して一度人を認知するや直ちに彼を信任し給ふた。ピリポが伴れて來た初對面のナタナエルを指して「見よ、まことに眞にイスラエル人

なり。その頃に虚偽なし」と申されし一同を驚かせたのである。シモン・アンデレ及びヤコブ・ヨハネ等漁夫達に遇はれた時にも直ちに「われに従へ、さらば汝らを人を漁る者とせん」と仰せられた。眼光一瞬即座に彼らを抜んじて使徒となし給ふた。真に驚くべき眼識である。所謂第六感の明知といふのであらうか。兎に角不思議な霊覚をもち給ふたのである。

○第廿四、温古知新

「子曰く、故を温ねて新しきを知る。以て師と為るべし」

昔はアテネ人も旅人も「皆たゞ新しさ事を或は語り、或は聞きてのみ日を送りねたり」と聖書（使十七廿一）に記録されてあるが、新しき詰珍聞奇談を聞きたがり、見たがる人間の心理は今も昔に変りはない。古い真理は顧みられず、新しくさへあれば馬糞でも拾はうとする世の中である。然し真理は恒に不変不動である。古代の真理だの「現代の真理」だの区別の別個のものが存在する筈はない。昔も今も変らざるものであつてこそ真理である。春は緑秋は紅葉、冬は白妙の衣と、四季折々の装ひは異つても、樹木其物が変つたのではない如く、真理は年月と共に其本質を変改するものではない。故に古い真理を各時代の角度から研究して新しく解釈する様でなくてはならぬ。恰も太陽が幾千万年来同じ光と熱とを宇宙の万物に與へてゐるが少しも古びてはゐないのと同じである。猶ほ永遠の神を温ねよ。「汝等エホバの書をつまびらかにたづねて讀むべし。是等のもの一つも缺るなく、又ひとつもその偶をかくるものあらじ」（イザヤ書廿四十六）と。又基督も宣ふた「われは道なり、真理なり、生命なり、我に由らずては誰にても父の御許にいたる者なし」と。（ヨハネ十四六）由て真理が何者であるかが知られるであらう。

ノソチストの著名の一記敎者曰く、

「我らが今日斯く各派別に運動してゐるのは恰も近視眼のやうなものである。我らはもつと目を高く上げて此時代は何を要求してゐるかを見届けねばならぬ」と。

聖書の人物一覧

◇イザヤ（紀元七四五―六九五頃）

「救世主の預言者」として知られたるイザヤは、南王國ユダの預言者である。：彼は、全世界にまで及ぶべき驚くべき神の救拯の恩寵は、やがて此國土に出現し給ふべき救世主によつて完成せらるゝであらうことを預言したのである。

ラビの口碑によれば、アモツの子なるイザヤはヨアシエの孫に當る王族であり自由に王宮に出入する便宜を有してゐた。　當時南王國は、ウジヤ王の殘後ヨタムが王位に即いたが施政宜しからず、富裕ハ驕り、貪民は虐げられ、風俗は甚だ頽廢した。其結果は人民滿々として迷信に陷つた。イザヤは斯る時代の風潮を見て、憂心禁ずる能はず口を極めて、人民を警めた。時恰も、お隣のイスラエル王國は、アウエリヤのセナケリブ王の為に滅されたので危機は忽ちユダの門口に迫つた。きのし、アハズに次いで即位したヒゼキヤは幸に賢君であり、イザヤの忠告を容れて、アツサリヤ人の來襲を防いだので幸うじて入寇を免れた。　爲るにその子マナセが王位に即くに及び、父王の志を翻へし、不信仰に陥り、イスラエルの為すままに、異國の風に倣つたのである。傳説によれば、イザヤは、此のマナセの治世中殉教の死を遂げたといふことである。

彼は書中にて後年出現し給ふべきイエスの生涯と其の最期につき記してあるが、其の敍述は明確にして、且つ懇々として身に迫るものがある。實に驚くべき預言である。（ヨハネ十三章）

新約書に、イザヤの預言として、明かに引用せられしものは數ヶ所に及ぶ。　以て如何に彼の預言が民族的生活に重視せられ、且つ愛用せられたかい籠はれる。　彼は、そは眞に預言者中の預言者である。

聖書研究の時

○舊約書中の奇蹟

前篇にて主イエスの奇蹟及び使徒達による奇蹟を掲げたので、今回は同一の課題を旧約書中に探ることにする。

奇蹟	聖書本文
○エヂプトに於て、アロンの杖蛇となる。	出埃及七ノ十一十二
災難、一水、血となる。	〃 七ノ廿一廿五
〃 二、蛙群の發生、被害	〃 八ノ五一十四
〃 三、蠅群の發生、被害	〃 八ノ十六一十八
〃 四、蚋群の發生、被害	〃 八ノ廿一廿四
〃 五、家畜の斃死、被害	〃 九ノ三一六
〃 六、腫物の罹病、被害	〃 九ノ八一十一
〃 七、降雹の被害、	〃 九ノ廿三一廿六
〃 八、蝗蟲の来襲、被害	〃 十ノ十二一十九
〃 九、地上の闇黑三日間	〃 十ノ廿一一廿三
〃 十、埃及中の人畜の長子斃死	〃 十二ノ廿九一卅
紅海の波浪分れて道通ず	〃 十四ノ廿一一廿一
曠野にて、メラの水、清められる。	〃 十五ノ廿三一廿五
〃 天よりマナ降る。(供食)	出埃及十六ノ十四廿五
〃 岩を打ちて水を得	〃 十七ノ五一七
〃 ナダブとアビウ(アロンの子)死。	利未 十ノ一一二
〃 エホバの火、イスラエルの營舍に發火	民數十一ノ一一三
〃 コラと其一族の全滅	〃 十六ノ廿一廿五
〃 アロンの杖芽生ゆ。	〃 十七ノ八
〃 モセ、ミリバにて岩を打ちて水を得	〃 廿ノ七一十一
〃 エホバの火蛇	〃 廿一ノ八一九
〃 ヨルダン河を堰く。	ヨシユア三ノ十一十七
カナンに於て、エリコ城陥落	〃 六ノ六一廿五
日と月と沮止せらる。	〃 十ノ十二一十四
列王亨麦ヒウザ神罰にて疫死。	サムエル後 六ノ七
〃 ヤラベアム王の子疫死す。	列王上十四ノ四一六
エリヤの奇蹟、油と粉無盡、寡婦の子の蘇生。	列王上十七ノ十六
エホバの火、祭壇を焚く(カルメル山上)	〃 十八ノ廿一廿八
五十人其隊長と共に天火に焚かる。	列王下一ノ十一十二
ヨルダンの河水分れ、エリヤ、エリシヤ渡渉。	〃 二ノ七一八

エ…シヤの奇蹟。

ヨルダンの河水分る。（エリンの遺秀）　列王下二ノ十四

エリコの水を潔む　〃　二ノ廿一廿三

惡童等熊に噛殺さる。　〃　二ノ廿三廿四

軍隊に水を供給せらる。　〃　三ノ十八ノ廿

寡婦に油を供給せらる。　〃　四ノ二ノ七

シユナミ人の子蘇生。　〃　四ノ廿二ノ廿七

憂の毒を解消す。　〃　四ノ廿八ノ四一

パン廿個にて百人に給食　〃　四ノ四十ノ四四

ナアマンの癩病癒さる。　〃　五ノ十ノ廿七

手斧、水上に浮く。　〃　六ノ五ノ七

來寇のスリヤ軍兵の目晦む。　〃　六ノ十八ノ廿

一死骸、エリシヤの遺骨にふれて蘇活。　〃　十三ノ廿一

イザヤ書中に引用せられし奇蹟。

アツスリヤ軍鏖殺せらる。　三下、十九ノ廿五

アハズの日晷逆行す。　〃　廿ノ九ノ十一

捕囚中の出來事。

シユダヤ人、火中を通りて出づ。　ダニエル三ノ九ノ廿七

獅子洞窟中のダニエル。　〃　六ノ十六ノ廿三

一眼記録によるもの。

ペリステ人等、神の櫃を持餘す。　サムエル前五ノ三ノ十二

ウジヤ王、天刑を蒙り癩病者となる。　歴代下廿六ノ十九

ヨナ大魚の腹中より出づ。　ヨナ二ノ一ノ十。

○人生。

古来東西の聖賢は、夫々に人間世の中の眞相を判る様に説明して、人間らしい世渡りをさせやうと、種種な譬を設けられました。即ち旅行に譬ひ、航海にたとへ、野場に、客に、宴内に飛込んだ鳥に、といふやうに、種々様々の立場から教へられてあります。

其中に、水戸黄門は、人生をお客の身分にたとへて「客樂の説」といふ家訓を作られました。「此世は、客に来るぶれば最理あるべし。心に適はぬとても客なれば嗜まねば当らず、冬の寒さにも客なれば堪えねばならず、腹立つことも荒稽とせねばならず。召使小者に至るまで、客なれば接待よく暮し、後に心を殘さずお暇申すかーー。」といふ

のであります。眞に平明適切なる人生訓であります。家康は又、人の世を重荷を負ふて遠き路を往くが如しと觀じ、急ぐべからずと訓へました。要するに、人生を客の身分と見るが故に斯くせよ、旅行者と見るが故に、その心得は斯々と、夫々の見方によつて、其心得方を異にするのであります。

昔、十返舍一九といふ人は東海道膝栗毛といふ書を書きました。それが有名な瀕死即興工喜多人の旅行物語で、江戸日本橋を振出しに、京都への道中、奇談珍出、抱腹絶倒といふ珍奇を綴つて居ります。見れば言ふ迄もなく戯作の物語に批して、一九其人の處世法を述べたものであります。即ち彼は作中の人物の如き一生を送つた人でした。どうせ長からぬ生命、何を苦人でコセコセ氣兼して暮さねばならぬか、此世は或が世なら、旅の恥はかき捨て、何でも出放題の世渡りの方が愉快ではないか。二度と來る娑婆でもない、といふ主義で暮しました。それで、彼は死際に遺言して「湯灌などせずに、火葬にせよ」と申して逝去しました。遺族も奇異に思ひながら、其通り致しますと、火葬中に花火が煙發して、飛んだ大騒ぎを演じました。死だ後までも人の世を善戯化すわつたのです。斯樣な人生は吾人には面白可笑しくて満足の知りませぬか。何等人の世に貢献するとの力はありませぬ。

偖て今を距る三百年程前、英國に巡ヨン、バンヤンといふ貧乏鑄掛屋がありました。熱心なクリスチャンでしたが、説教したのが悪いとのお咎めにより、十二年間の入牢に處せられました。彼は獄中にも、せつせと働き、靴紐の先金を造り僅かの工賃を得ては送金し、一家四人の生活費を助けたのであります。斯く貧さと人の世の苦難を体驗した場句、人生は重荷を負ふて遠く天國への道を辿る旅人の如しと觀じたのであります。そして、彼は獄中、筆を執つて其の豊富なる想像によつて描寫したのが、有名なる天路歴程即ち The Pilgrim's Progress であります。彼によれば現実の世は出鱈目に面白可笑しく暮すには餘りに深刻であります。幾度か落膽の迫に陥り、絶望の城に囚なん、死の陰谷を渡り、紛孚の町を通

らねばならぬのであります。斯くて死の河を越えて漸く天国の門に達するのであります。其間の波瀾曲折を描き、眞に悔天を起たしめるものがあるもちろんがバンヤンの人生観の記録であります。そこには前者に見るやうな抱腹絶倒はありません。然し深刻なる苦難の中に希望と忍耐の信仰が燦然として光つてゐます。此書發行以来今日に至るまで、發行部数の巨大なるかつて聖書と共に世界第一を占めてゐると謂はるるも當然であります。

一九二一年にはバンヤンにしても、人生を旅行者と見立てたものは同一でしたが、一方は、どうやら花は咲いたやうだが一向に實が結らず。他は、花は見る陰もなきものでしたが、其の結果は実に素晴らしいものでありました。人生の目的は花ではなく其の實にあるのです。實らぬ人生は無用の長物です。その収穫は神の御倉に歛められる値あるものでなければなりません。

「愚かなる者よ、今宵汝の霊魂とられるべし。さらば汝の備へたる物は誰がものとなるべきぞ。己れのために貯へ、神に對して富まぬ者は、斯の如し」（ルカ十二）とありますが、御同様人生途上に立る者のよく考へねばならぬ問題であります。

駒鳥夫婦はせつせと愛の巣を作りました。恰度それが出来上つた日です。一寸留守にしてゐるうちに憎まれ者の百舌鳥が来て、其巣に入りました。帰つて来て驚いた駒鳥は「それは私達の家だから、どけて下さい。」と申しました。すると百舌鳥は「誰に断つて此處に巣を作つたか。此森は俺の場所だ」といつて、いくらに頼んでも、てんで相手にしてくれません。駒鳥は仕方ありませんから、他方に又新らしく巣を造りました。そこで何もかく卵を産みました。そして、しばらくすると、卵は皆卵化りました。ので、夫婦は急に忙しくなりました。しかし、日一日と大きくなるのを楽んでゐました。或日のこと、餌を拾ひて帰つて来ますと、又して

も百合島が、大きな體を巣一杯にぬさばつてゐます。驚いた駒鳥は「それは私の家です。何だつて断りもせず他の家に入るんです。そちらにはベビーが居る筈です。さつさと、どけて下さい」。すると百合島は横柄に羽ずまいを直して「一体誰に断つて此處に巣を造つたりしたか。此森は俺の場所だ。お前等の入る所じやない」といつて、何とても動きません。仕方がありませんから、それではベビーだけでも早く出して下さい。そんなに居られてはベビーが潰れてしまひます。」すると百合島は「誰に断つて此処にベビーをんで産んだか。此森は俺の場所だ。」駒鳥もまんな無茶な奴には叶はないと諦め「では兎に角ベビーを早く渡して下さい」と哀願しました。「豚手に拾つていけ」と、百合島は吐出す様に怒鳴りました。ハッと思つて樹の下を見ますと、ベビーは遥か下の地面に叩きつけられて、四つの小さい頭は無惨に潰されてゐました。駒鳥は悲しくて悲しくて、二日間其場で泣暮しました。三日目でした。兎に角仕事をせねばならぬとおもひ漸く気を取直して、恐る〳〵痛ましいベビーの姿を、もう一度見ました。すると、不思議なことに死骸は見當りません。私が此処に居るのに誰も取つて行く筈はないと、尚四辺を探しますと、大勢の蟻共が黒山のやうに寄たかつて、死骸を運んでゐます。駒鳥は二度びつくり。「オイ〳〵蟻共、私のベビーを何処へ持て行くつもりだ」と叱りました。すると蟻共のいふことに「それは〳〵駒鳥さん。あんたのベビー運とは知りませんでした。兎に角斯様な死骸を此辺に放つておく事は衛生上甚だ悪いので、出来るだけ早く形付ける様にとの神様の御命令もありましてね。運んでゐますんでー」「では、どこへ運ぶと云ふのか」と駒鳥は不手りしく申しました。「それは、あなたきまつてゐますよ。私どもの倉ですよ。」「お前どもの倉庫へ？」と駒鳥は驚いて叫びました。「左様です。此辺では凡て和方でお引受け致します。昨日も茅黒のおばさんを形付けましたよ。」駒鳥は口惜しやら悲しいやらで、又しても泣きました。去り、其間にも蟻共はサツサとベビーの死体を運去りました。駒鳥はそれを知つてゐましたが、それはといつて、どうする事も出

千足漫吟（其の五）

あかゝ

○路のべに咲く岩ぼたん。
見ちがとは、路にもさけや岩ぼたん
裾のうちどころもさとにして。

○春かすみ山の端包む帕子（かはのなゝ）
ぬきてぞ来ませ春のみん神。

○園丁の業えに咲けるる素直さよ
勝利花園の花のいさをし。

○暮らしをき
せに切り詰めん事もなし
鐘をる時し食へばまろも。

○うたよみて
何とくありをおもはねば
歌よみなれば心たぬしも。

□大まち「親のいけにへ」
（母の日にのぞみて）

「一粒の麥地に落ちて死ずば唯一つにしあらむ

○各地共同肥の移動が愈よ頻繁になつてまゐりました
が御住所変更の場合は先ず御一報下さる様願ひます。
本誌には特にはがきを添えておりますから何卒御利用下さい。

○御親其他の原稿をした上で当所へ直接お手許へ送る
やう依頼せんした方々もありますが其部数も多数ですが、其場合、その好意的賜稿者のお名前を帯封の左下に特記してありますから御注意下さい。
時節柄読者諸兄姉の御健在を祈る。

若し死なば多くの果を結ぶべし」（ヨハネ十二・廿四）

「種は三百年を経て枯れて倒れて朽太になるのみ」と
さあれ「一は二のための犠牲ぞ」と
かれはゐみついくさんやく
見よ親著の愛の勝利を
斬らしき命のために
自己一切の義分を
子等に與へて悔ゆるなき
親著の尊き愛のいけにへよ
その子子著にかさまれて
子著のためにもたしつゝ
今たき地下にくされゆく
慰なるかな。
成熟したる子著等よ
ちかちにみちゝたる子著等よ
累々手とりて　おのもおのゝ
寶玉のごと　うつくしさ
親著八方ほし子著の生涯の
かゞやかしかれと祈りつゝ
親著は淋しく地下へ腐れゆく
いでわれれ

人の親なり、いけにへと
子等のためには我れもて全て献げて顧みず
子等の成人を感謝せむ
今親著に微ひ犬る愛の勝利を歌ひつゝ
子等の國にはてゝ曰く
「一は二のための犠牲ぞ」と。（ヨハ十二・廿三）

○聖日朝陽　唐澈

とく起きて　にほへる日の出めづる野の
かすみにおもるメスの遠ふかね。

○偉人のあゆび

エバ　ギルガー作
白石清輝

我は旅す生命の道　唯一度
喜びにおどり　悲しみに嘶ぐ
ソトに歌あり　試練あり
黄金の　粗金に混りしごと。
歓樂は体覚　朝露の如し
時ぞ苦難を生る。鎮痛剤
天帝の尚我を使命に召し給ふあり

我は生き、生き、而して生きんのみ。
生命を眞に價値あらしめんため
我等他のために生くるに如かず
歡喜のために苦くるものを
我は與へ、與へ、而して與へんのみ。
時として遂に疲れし靈を見ん
辛苦に窶れ、心勞に憔みしなり、
我たゞ祈かする微笑を與ふるまでだに
彼等の重荷を助くるを得ん。
愛を慕つて泣きざる人の靈
神に似ひ、われ又友を愛さんから
形式てふものゝ如何にもあれ
その表現にこだわりなくて。
何より先づ我を忘るゝことなり
わかためにはあらで隣人のために
出づに我八人生最高の幸福を感ず
われ與へ、又與へ、而して與へん時に。
「凡そわが弟子たる者の故に、この小さき者の一人に冷かなる水一杯にても與ふる者八、誠に汝らに告ぐ、彼その報を失はざるべし。」（マタイ十章四二）

人生基礎

○人の世のはかなく

廣しとて狭しとて、要するに我等の世界は二つとは無いが、仕む人の心々に様々かある。浮世と見、憂土、樂土と見るも皆見る人の心柄である。此一篇は子が、そこはかとなく泣りて摘墨めたる中より、人の世の様々を綴り合せたものである。

● とりとめのなき日とけふも暮れにけり
日にけに秋の風は吹きつゝ。（牧水）

無爲徒食。退屈で身の置所なき生活ぐらゐ虐めものは無い。我は五尺の體を持て餘てゐる。趣味は無藝大食で暮供養するだけが養ひ徳だといふ。

● したたかにわれに喰せよ名にし負ふ
鬼野が浦はいま鰹時。」（牧水）

しかし、いくら名物の好物でも、一貫一杯以上は食べられもせぬ。それでも飲酒家は兎角無地酒なくて、度を過し、一刻の歡興に十日も廿日も苦勞する。不攝制は結局我身の不爲。今後は斷然禁酒することにしやう。否、「斷然」でなくてもよい筈、一時に止めたら體に障るだらうなどと抜け道を設けず自ら申譯してゐる。

センターすもう
10
○巡査。
センターの人気投票
ナンバワン。
A PROPERTY
∵軟球
∵演藝会見送り。
∵木彫。
∴一寸待て拘留一日。
●お葬式を忘れ
後戻二回
∴町の孝行
∵短期出所
∵優勝(特)
○歯痛。
我輩も
義のせいかや
歯の痛み。
○碁倉所。
其の一手 如何に左ると
―たり殺。
●木彫。∵碁倉所
∴クリニックで一日休み。
∵大人学校。∵大事。
○ギヤベチ取り。
親子で
夜ろ
まわる
ギヤベチ取り。
●お葬式
∵雨降 ∵時々
∵食堂 ∵軟球

●酒やめむ　それはともあれ永き日の
　夕暮ぢろにならば何とせむ。（敗水）

何と思切りの悪いことであらう。去の一どうにもやり切れない。そもそも

●朝酒はやめむ　重ざけ、せんもの一
　ゆふがたばかり少し飲ま一め。（敗水）

結局折角の決心も永續きはせず、「わか禁酒破れかぶとなりにけり。やれついでくれ、それさ一てくれ」

●老弱行のなれの果てゝある。

●開かぬやう神のつくりし誕の鍵
　さびにしまいに終へむわか世か。（あき）

、あゝ、人間は自ら其出發を誤つたことには気がつかず、誰か悪いと彼が悪いと、神を詛ひ、世を怨ひ、結局我身の不運と諦めるの外はない。然し乍ら、如何に苦難の生活であつても、現在何とか生きてゐられることを見れば満足捨てられた生命でもないやうだ。

●世の中を怖ずつゝ使めど生きてあれば
　天地は猶われを生かすも。（左千夫）

早まつて我から見捨ることは及ばぬ。運は尚どこかに遺されてあると見られるか、まだ一もの歴である。それにつても人生は餘りにも複雑怪奇に満ちてゐるのではあるまいか。

●破れたる二つの道を一つ得て
　あやまちぞとは誰がいひそめし。（あき）

人生の岐路に立ちて、右せんか左せんかに迷つた場句。其の一方を選ぶ不幸甚結果が悪かつた時、それ見ろと人は嘲ふであらう。どこまでも悔めもき世の中ではある。（以下次号）

○世界唯一の純インデヤン學村としてオクラホマにベーコン大學といふのがあり、バプテスト教会の經營であるが、目下その維持会員三千人の募集に暮子せりれた。

○ワシントン府在住の著名なる埃及人ヌ嘗で同市にモハメット教の大殿堂を建設せんとしてゐる。ところで其發表を聞くや、多數の基督教徒達者達ハ此の計畫に好意を表してゐると報ぜらる。曰く、信教自由の國の首府に他宗の会堂の建てられる事ハ給樣な事である。世界征服の使命あるクリスチヤンが、之で斯る他宗に接觸すること、は望ましき事であると。征服する前に征服せられさうな問題の問題。

○デトロイト市の宗教事情統計、以下の如く發表、以下ハ其教会数。

キヤソリック（一五七）。ユニヤン人会堂（三五）。ずーニヤ旧教（一四）、新教各派七五一、内訳メソヂスト（九七）、長老（六八）、北バプテスト（七一）、黒人バプテスト（六五）、ルーテル（二六五）、聖公（五二）其他

○ヘレン、ケラー女史は此度通譯を同伴、政府の諸病院を訪問して不遇なる兵士達を慰問せらるゝ由。

○フヰラデルヒヤの東部バプテスト神學校長コルゲン、パーマー博士は来る八月十日～十九日加州桑鴻地方夏季修養会に講師として招聘せられ出張せらるべしと。

○日本軍占領下の支那各地に八分商多数の宣教師還が收容せられて居る。即ち支那内地傳道協会管轄下の二五五名ロンドン宣教會管轄下の一〇七名英國バプテスト傳道局下の四九名火蘭メソヂスト宣教會管轄下の九〇名福音宣教會所屬宣教師八一名、其他個人又小團所屬宣教師ありと。（ロンドン3.3.明治

○將介石將軍は此度、全國の全國基督教協会に對し、支那軍の士氣作興の為めに一千名の基督教々師の入隊を要請した。即ち支那軍隊所牧師團を組織する事を要望したが種々の事情より実現性なしと。

○サウスイント市内リンカーン、クリスチヤンセンターには、フイルプス牧師主任として活動中也。即ち廿二ヶ國の人々世のクラブ、及び其他の諸團体を率ゐてゐる。毎日曜三日曜學校及び礼拝が營まれ地方在住者及び支那人メーリンカン、バプテスト会員が主に集合してゐる。

○昨年度中米國内には教会堂の火災事件が二千六百件であつた。その損害は四百五十万弗に及んでゐる。その原因は概ね教会事務員と會堂守の不注意にあると。

○地方の日刊新聞に傳道文を掲載するため、ミゾリーの一牧師は白費を投じてゐる氏は曰く、「此方法は極めて時宜に適した傳道法であるから、各地に於て協力してやるよう」と。慨に傳道の良策であると。尚氏は四千部に對し一千弗支拂つてゐると。

○南部バプテスト外國傳道局にては本年度世八名の新宣教師を任命した。―アフリカ、八名、パレスタイン二名、ハワイ五名（其中四名は結婚日本へ渡る人々）支那へ五名、ブラジル九名、メキシコ二名、コロンビヤ三名、ラテン、アメリカ五名。尚同傳道局管轄内の宣教師人都で五四二名、世界中十九ヶ國に分布してゐる。尚各方面の要請に應ずる為には更に三百名々要する由。因に同派の宣教牧師、年年度九千九百名の度況者を得た由にて今年中の目標は十万人であると。

○スルー、アーケピラゴーとはヒリツピンの西南、殆どボルネオに接觸する大小四百の島嶼より成る群島國である。その存在は小説すら怪奇さに満ちてゐる。一夫多妻と奴隷の習慣は今尚行はれ、子供結婚は今流行でゐる。ボルクンの王旗には大力の傍に数個の屋をあしらつたものを掲げてゐる。

○ムソリニ政府は、イグリヤにて八新教の反対刊行物中の二紙が發行を停止せられたと。

それはワルデンシヤンの週刊「光」と「バプテスト傳道週報」とであつた。それが共に此度ムソリニ没落と共に解散せられた由。

○ニヨーデ、ツルーキット記念會館建設費今日までに四千弗に達したと本月より報告。

○外國傳道の宣教師を願着立するありて日下その試驗の準備中の由リチモンド宣教本部より公表せられてゐる。

○現時米人間に南米熱甚盛で、ワールドアウトルツク誌の三月号には、ブリヤム大學にて汎米協會より一國二人づつの學生を招待し、路費學資一切を支辨して留學せしむるといふ計畫を發表した。メソジスト派が特に熱心に傳きかけてゐる。即ち、キユーバ、メキシコ、コスタリカ、パナマ、ボリビヤ、ペルー、クリル、アルゼンチナ、ウルガイ、ブラジル、ポートリコ、ドミニカンの諸國であつて、學課中に汎米國際をも加へらるべしと。四教方面にては更早く、宣傳員を、是等の各國に派遣して四政大學に四方面より學生を吸收すべく乗出してゐる。

○全米國内諸教派の牧師總數は現在のところ判明しないが、去る一九四十年度調査、合衆國内の其合計八十四万七十七人で、中十万六千六百六九人が男子、三千四百八名が女子であつた。明年度は宗教関係諸團体の人口調査を実行せらるる故、各方面の協力を希望するとつけたしである。

因に前回の宗教センサスは一九三六年に行はれて居り、二九六教派團体、九万九千三百〇二の教會及、五千五百八十万七千三百八十八名の會員数であつた。

○紐育市聖公會主教閣下「チヤーチマン」誌社八例年大學会を催し、社会公等に貢献した人物八人を招待して猛に表彰されるので、既に此の名譽に與りし人々ハルーズベルト大統領夫人、ウヰルソン、ホワイト、ルズベルト大統領ウイルキー、新外相夫人、バアナード、バルク、の婦人であつた。今年ハヘンリー、ワーレス商務相女其選に當つてゐる由である。

○モルモン教にてハ、戦後、全世界に派遣すべき宣教師の諸準備を完成した。同教の男信徒達ハ其傳道事業に、時と労力を献げたりとは多大である。その効果の顕着なるものあり当然である。戦ハ、修行の信條に何等の関心をもたないが其傳道遂行ハ全く感心であると、ワツチタン誌は其最近報道所感とほめてゐる。

○現代著名の聖書學者の一人キンベル、モルガン博士は去る五月七日、八十才の誕辰を以て、ロンドンにて永眠せられた。氏ハ先年米國内廿七大記教家中に數へられた人、英國生れであるが同氏は嘗米ムーディ氏に見出されてノースフイルド修養会に紹介せられ、米國聖書講解の多才を認められ、著書又多し。

○N.A.ベンズ牧師といふスチーン人宣教師は自由支那地方所在の戦時収容所に出入して傳道に微事してゐた人であるが、過般一収容所にて世名の日本人捕虜にバプテスマを施したる由報道せられた。